

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：34416

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26560423

研究課題名(和文) 冒険遊び場づくりの実態と地域コミュニティ施設としての可能性

研究課題名(英文) Survey on adventure playground and the possibilities as a regional community facility

研究代表者

大影 佳史 (OKAGE, Yoshifumi)

関西大学・環境都市工学部・教授

研究者番号：20303852

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：都市の屋外空間における冒険遊び場等の外遊びの場所づくり活動について、文献等調査によって網羅的把握を行うとともに、活動場所および活動主体のタイプの異なる冒険遊び場の事例、小学校施設を活用した子どもの居場所づくりの事例、冒険遊び場で実施された小屋づくりワークショップの事例、等の具体的事例について事例調査、実態把握を行った。これら調査を通じて、冒険遊び場のような外遊びの場を地域社会のコミュニティの場として形成する際の課題、またそのような場所づくりを行う際に、そして存続させる際に必要となる計画的知見について考察した。

研究成果の概要(英文)：The situation of place-making activities for outdoor children's play such as adventure playground was grasped comprehensively through the literature survey. And, field surveys and actual situation grasp were conducted for case examples of different adventure playgrounds with different types of sites and actors, case examples of place-making activities for children's play in elementary school facilities, and case examples of hut making workshops conducted in adventure playground. Through these case studies and investigations, tasks for making place of adventure playground as a regional community place, and knowledge necessary for planning and continuing such place were considered.

研究分野：環境デザイン・建築計画/設計

キーワード：冒険遊び場 子ども 地域 コミュニティ 施設

1. 研究開始当初の背景

環境破壊や子ども育成環境の悪化に関して、古くから警鐘が鳴らされてきた。木下の三世遊遊場マップは外遊遊環境の変遷を捉えたものとして知られている。外遊遊環境づくりの実践については、1970年代の大村による「冒険遊遊場」の日本への紹介、経堂、羽根木のプレーパークづくりが先駆的例として知られる。以降、このような外遊遊環境づくりの取り組みは「冒険遊遊場、プレーパーク」として、近年広がりを見せている(冒険遊遊場づくり協会によると311団体(研究開始当初時点))。子どもの外遊遊や学びを支える都市や地域の屋外空間の在り方は重要であるが、そのような環境についての空間設計論、都市・地域の計画論としての位置づけ、有効な成果は得られていない。またこれら活動は、住民や有志の自主活動からのものが多いが見られるが、その実態についても十分には把握されていない。研究代表者は実際にこの実践的活動に関わるなかで、遊遊場づくりは、子どもの遊遊を主にしながらも、高齢者まで様々な年代が遊遊に関わり形成しうる地域コミュニティとして位置づけることができる、また子どもの観点を据えて都市、地域の空間を考えることが今後の都市・地域計画において必要であると考えようになった。

2. 研究の目的

子どもの外遊遊環境を作り出していく冒険遊遊場づくりの活動のなかに、都市、地域、屋外公共空間の計画論に反映できる視点を見いだすと同時に、冒険遊遊場のような外遊遊の場を、新たな地域社会のコミュニティの場、施設として形成していくことの可能性を検証するものである。具体的には、国内の冒険遊遊場づくりの活動等を調査対象とし、その実態を把握すること、また調査、実態把握を通じて、そのような場を老若男女ふくめたコミュニティの場として形成する際の課題や、そのような場所づくりを行う(計画、設計する)そして存続させる際に必要となる計画学的知見(施設、空間としての設計・計画学、および地域・都市の計画学について)を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

国内の冒険遊遊場づくりの活動等を対象として、研究期間を通じて以下の調査、実態把握を行い、これらを通じて、冒険遊遊場のような外遊遊の場を地域社会のコミュニティの場として形成する際の課題、またそのような場所づくりを行う際に、そして存続させる際に、必要となる計画学的知見について考察する。

(1)冒険遊遊場およびこれに類する活動や取り組み、特に都市の屋外空間における外遊遊場および外遊遊の場について、既往研究の整理、文献等情報の調査、現地調査等を行い実施活動事例の網羅的把握を試みた。

(2)活動場所・活動主体のタイプの異なる冒険遊遊場の事例、小学校施設を活用した子どもの居場所づくりの事例、公共空間での子どもの遊遊発生事例、等を対象とした実態調査を行い、場所や活動、運営管理の状況等を把握し、場所づくりにおけるこれらの課題について考察した。

(3)より具体的実証的に冒険遊遊場の1事例を対象とした実態把握、冒険遊遊場で実施された小屋づくりWS等の検証を行い、参加者属性や意識、空間・行動等の特徴や場所に求められている機能や特徴について把握した。これらを通じて、対象事例が多様な世代が関わるコミュニティの場としての性質を有していること、またその地域コミュニティ施設としての可能性について考察を行った。

4. 研究成果

本研究で行った事例調査の中から、主な調査の内容、成果について、概要を以下に示す。

(1)活動場所・活動主体のタイプの異なる冒険遊遊場の事例

冒険遊遊場およびこれに類する活動や取り組みについては、活動場所、活動主体、運営方法、開催頻度、運営管理の状況など様々であり、多種多様な活動がみられること、一概にその特徴を論じることが困難であることが網羅的調査からもうかがえた。

ここでは、活動場所・活動主体のタイプの異なる冒険遊遊場の事例として、活動主体が地域住民、活動場所が公有地である「U」プレーパーク、活動主体が地域住民、活動場所が私有地である「M」プレーパーク、活動主体(事業主体)が行政、活動場所が公有地である「C」プレーパークの、関西で活動する3事例を調査対象とし、開催頻度、運営資金、活動のきっかけ、活動メンバー等についてヒアリング調査と観察調査を行い、運営管理の

表1.ヒアリング調査の結果(一部抜粋)

	「U」		「M」		「C」	
	住民	公有地	住民	私有地	行政	公有地
開催頻度	週末・不定期月2回 10時~16時		第3日曜日 10時~15時		水曜、土曜、日曜、祝日 10時~17時	
運営資金	ふれあいサロン事業助成金、全労済地域貢献助成金、キリン福祉財団助成金、子どもゆめ基金助成金		参加費(1家族1000円)、市市民活動支援基金事業助成金		事業委託金、法人会費、イベントや講習会による事業収入、子どもゆめ基金助成金、みづち倶楽部助成金(一般企業)、寄付金	
活動のきっかけ	*子育て中の母親が子ども達が自由に遊べる場を作りたいという思いから始まった。 *公園を選んだ理由は、設備が整い、広さや自然環境に恵まれていたため		*設立メンバーが地域に住んでいて、元々は別の山道の途中で開催していたが、活動を見ていた山の地主さんが土地を譲ってくれた(人のつながり)		*児童館をつくる構想が生まれたときに、屋内の遊遊場だけでなく屋外の遊遊場を作ること子ども達の為にという事で、冒険遊遊場の計画がたてられた	
主な遊び	ベニヤ板プール、工作、台車遊び、ハンモック、虫取り		ターザンロープ、手製ブランコ、ログハウス、虫取り、流しろうめん、ビザづくり		虫取り、キャンプ、イベント列車、ターザンロープ	
運営メンバー	住民ボランティア		参加者兼ボランティア		NPO法人スタッフ3名	
ボランティアについて	*約10名 *毎回来る事ができるスタッフは4.5名程度 *小学生の参加者が小さい子どもを見ていた		*女性ボランティア2名 *自分の子どもを持たない大人が見に来てくれている *普通遊んでいた子どもが大きくなって遊びにくくなっている		*ボランティア登録者は20名 *イベントの日には常時20名ほどの世話人が集まる *見学にきた学生も参加している	
活動当初	公園の占有許可を取りに行った時、役所の方が活動に協力的だった。また、近所の保育園が駐車場の貸し出しと、倉庫を置かせてくれた。活動に協力的な方が多い		地主さんから譲り受けた山林の中で行っているため、地域住民との問題は起こることがなかった		計画時、居住地の中心にあるため、騒音問題や危険性から反対があった。しかし、始めるまでに3回行ったワークショップやプレオープン、活動中のイベントなどで運営者が熱心に子供達への思いを伝えた結果、幼稚園の園外保育や小学校教師の教育など地域のコミュニティとして認められるようになった	

状況等について把握した。(表1)

活動の実施や継続性に関わる事項として

- ・いずれの事例も、運営資金に民間や行政の助成金による部分が多い。
- ・いずれの事例も、運営においてボランティアスタッフによる部分が多い。
- ・活動主体が住民の事例では、ボランティアとして、子育て中の父母のほか、昔遊んでいた子どもなどもみられる。
- ・活動場所が公有地の場合特に、活動実施に、行政や住民の理解や協力が得られる事が重要である。

などの特徴がみられた。

(2) 小学校施設を活用した子どもの居場所づくりの事例(宝塚市立小学校の事例)

子どもの居場所づくりに関わる活動事業の一つに「放課後子ども教室」がある。「放課後子ども教室」は冒険遊び場づくり活動とは別の事業であるが、宝塚市の事例の場合、同時に、冒険遊び場づくり活動の側面を持っていることから調査対象とし、市へのヒアリング、運営に関わるNPO法人や児童館の担当者へのヒアリング、各校区の実行委員会に対するアンケートを実施した。

調査対象とした宝塚市では、24校区のうち22校区で事業が実施されている。事業の運営にあたっては各学校区において保護者や地域住民から構成される実行委員会を組織し、市が実行委員会に事業委託を行う事によって事業を実施している。事業の実施形態の特徴として、「放課後遊ぼう会型」「出前児童館型」「地域主体型」の3つの形態を有していることがあげられる。

「放課後遊ぼう会型」は、子どもの遊び場づくりを目指すNPO法人放課後遊ぼう会より、子どもの遊び全般をサポートするプレイヤーの派遣を受け、保護者や地域住民と協力し実施している。22校区の内6校区が該当する。

「出前児童館型」は、市内の7ブロックごとに設置されている地域の子供の居場所や地域子育ての施設である児童館から遊びの指導をする児童厚生員が各小学校に出向き、保護者や地域住民と協力をして事業を行う。22校区の内9校区が該当する。

「地域主体型」は、NPO法人や児童館の協力を受けて保護者や地域住民が一体となって運営している形態である。22校区の内7校区が該当する。

実行委員会のメンバー構成、開催頻度、参加者数、等の実施実態について

実行委員会のメンバーは、地域住民、PTA役員、一般保護者、その他(校区外の方等)のケースがあり、各校区によって、構成割合、人数等は異なっている。また校区によって、開催頻度や参加者数等も異なる。3つの実施形態に分けてみると「放課後遊ぼう会型」ではPTA役員「出前児童館型」では地域住民の割合が比較的多い傾向や、メンバーに一般保

護者が多い校区で開催頻度が高いケースがみられるなど、実施形態による違いや、メンバー構成と開催頻度、参加者数との関連がうかがえた。

各校区の実行委員会に対するアンケート調査から、活動にかかわる課題等について把

表2.子どもを育む環境において大事なものは何か?

放課後遊ぼう会型
・子どもの自尊感情を育むために、子育てに地域住民が関わることができる環境。
・子どもの成長を見守るために、子どもと接点を持ち、子どもへの声かけやあいさつを継続する。
・地域のいるいるな立場の人が見守れる環境。
・自由に異年齢集団で毎日遊べる環境。
・遊ぶ環境。
出前児童館型
・大人・地域の見守り、愛情。
・自由に遊べる場所の確保。
・自分を認めてくれ、信頼できる大人がたくさんいること。
・子どもとスタッフとの信頼関係。
・大人の目線がなく、子どもの輪に入って遊ぶ工夫を教え、同じ遊ぶ環境づくりをして行くこと。
・あたたかく見守ってくれる大人の存在。
・何かあれば思いを訴えることのできる環境。
・自己肯定感を育てる言葉かけをしてくれる人の存在を感じることのできる場所。
地域主体型
・地域住民の目が多くある場所が多数あればいい。
・子どもが自主的に行動できるような環境作り。
・小さな怪我ではなく大事故になる可能性のあるものは取り除くこと。
・異年齢との関わり。
・異年齢と関わり。
・人と触れ合い。
・親子だけの世界でなく、周りの人間との関わり(特に、お年寄りの方々が大切)。
・いろんな人とのコミュニケーションや関わりを持つこと。

表3.事業継続において不安なものは何か?

放課後遊ぼう会型
・実行委員会のスタッフの確保が難しい。
・けがやトラブルに対する対応のため、マニュアル作成や訓練や研修が必要である。
・どこまで対応できるのか不安が多い。
・後継者。ボランティアの確保。
・財源。
出前児童館型
・予算。人材。安全。
・子どもたちの安全が守れるか
・事業継続のために関わってくれるスタッフ・ボランティアの確保。
・学校との接点に係わるスタッフ不足。
・地域のスタッフが減少。
・高学年(5年生・6年生)になると、習い事、塾等で参加率が減少していく。
・ボランティアの急激な減少により運営が困難になっていること。
・働いている、子どもが多い、役を兼務している多忙などの理由により、また児童数の急激な減少により、PTAの手厚いサポートが期待できない状況。
・地域の方やOBの協力により現在は問題なく運営できているが、高齢化やOBの仕事が忙しくなるなど、最近参加が減少傾向にあり、参加ボランティアの負担が大きくなっていること。
地域主体型
・スタッフ(実行委員)になる方が少ない。
・大人も危機管理能力が少ない。
・小学校校庭での開催なのに、校長によって学校の理解と協力を得られない年がある。
・スタッフの後継者。後継者を見つけ、育て、つなげていくこと。
・担い手不足と高齢化。
・予算縮小。
・スタッフのスケジュール調整。
・いろんな人とのコミュニケーションや関わりを持つこと。
・何か大怪我や大事故が起きた際に、どこまで責任が取れるのかという不安。
・学校との良好な関係が壊れるかどうか。
・ボランティアが少なく常に人手不足。
・これからのような形で継続していくのかがはっきり決められていないこと。
・この事業自体があまり知られていないと云うこと。仕組みがよく分からない。

表4.開催時に遊びの面で必要性を感じたものは?

放課後遊ぼう会型
・異なる年齢で遊ぶ体験。
・遊びを通じて創意・工夫が生まれる。
・自由遊びに対する学校や保護者の理解。
・友達も遊ぶ道具もたくさんあって、自由に使えること。
・ルールを守って遊ぶ習慣を身につけてくれます。
出前児童館型
・子供と同じ目線になれるかどうか。
・新しい遊びのアイデア。
・道具がなくとも工夫して遊ぶ。
・発想や柔軟性。
・一緒に走り回ってくれる若い力。
・じっくり付き合ってくれる大人の力。
・ゲーム・折り紙等。
・開催する場所は屋内外ともに環境は整っていますので十分だと思います。
・危険やけががないよう、見守り人数がある程度必要と思います。
地域主体型
・大型遊具でのケガが多いが撤去は避けてほしい。
・安全は大切だが、遊びの中で習得するバランス感覚が幼少期より養っていないのでは。
・飽きやケガも大切に受け止めるが、走り逃げる「おにごっこ」でバランス感覚を養い、「クラフトDIY」で創造力を刺激し遊びを考え出す力をつけていきたい。
・達成感・最後まで自分でできたという達成感をもつことで自己肯定につながる。
・協力・協調性・昔でやりあがるという思い、自分が出来たあとに困っている人を助ける姿勢。
・見守る大人。普通遊びを教える人。
・遊びを身で教えられるのではなく自分で遊ぶ。自分で考えて遊ぶということ。
・危険なことを自分で分かって気づくこと。

表5.運営面で必要性を感じたものは?

放課後遊ぼう会型
・保護者や学校などの情報交換。
・行政・学校・その他の関係機関との連携(一団体では解決できない課題があり、連携が必要である)
・保護者や地域住民ボランティア。
・プレイヤーを配置できるだけの財源。
・特になし。
出前児童館型
・予算。
・人材。(老若男女問わず)
・学校の協力。色んな分野のプロの人の知識から子どもたちが学ぶ。
・子どもの居場所という意味ではPTAはもちろんです。地域の方々がもっと関わりを持ち、子ども達に愛情を注ぎ一緒に育ててくれる場所になればありがたい。
地域主体型
・児童の指導員同様、プレイヤー(有償ボランティア)のような存在が必要だと考えている。(リーダーの条件・毎回の開催時に責任をもち参加し、危機管理能力を生かす。学校・児童・PTAとの連携を大切にす。)
・校区内学校・幼稚園・児童館・市・PTAとの連携、ご協力とご理解が必須。
・スタッフの後継者。
・広場を運営するにあたっての十分な場所と備品を収納する場所の確保。
・専門家の知識・色々な分野のプロの人の知識から子どもたちが学ぶ。
・伝えたい気持ち、学びたい気持ちが一緒にあってこそ広場の意味がある。
・ボランティアさん。
・電話。(困りでも連絡が取れ、心配事がある時からも電話を受けられる)
・学校の協力。(場所や遊具の貸与。親との連絡や子ども達の事情などの相談)
・学校・先生・保護者・地域の方々の理解、協力。
・PTA執行部との関係を保ちPTAに協力を求めていくこと。
・もっと大きな後継者が欲しい。

握した。主な結果について以下に示す。

「子どもを育む環境において大事なものは何か？」(表2)については、3つの実施形態に共通した回答が多くみられ、地域や大人の見守りの必要性、自由に異年齢集団で遊ぶことの大切さがあげられている。「地域主体型」に特にみられた回答として、お年寄りとの関わり大切さがあつた。大人の必要性については、子どもを狙った犯罪の防止や抑制だけでなく、子供が大人とコミュニケーションをとることが出来るように、また大人が子供を認めることで子供の自尊心を育むことが出来るという考えがうかがえる。

「事業継続において不安なものは何か？」(表3)については3つの実施形態に共通して「人材不足」、「予算」、「安全」があげられている。「地域主体型」に特にみられた回答として、小学校との連携・協力に関する不安や、将来の事業の継続性、事業の認知度などを不安とする回答があつた。

「開催時に遊びの面で必要性を感じたものは？」(表4)については、見守る大人や遊びを教える大人が必要とされている。物的な面では遊ぶ道具がたくさんあって自由に使えるという意見がみられる一方で道具がなくても工夫して遊ぶことが必要だという意見もある。また遊びにはある程度危険が伴うことや子どもの喧嘩もつきもので、始めから拒絶しないで見守ること、それを保護者に理解してもらうことが大事だという意見がみられた。

「運営面で必要性を感じたものは？」(表5)については、3つの実施形態に共通して人材不足が問題となっていることがうかがえる。「地域主体型」では他の2つの形態と違い、プレイリーダーや専門家など子供と共に遊ぶことができる保護者や地域住民ではない大人が存在を必要としている。また、怪我などの何かしらの責任が発生した時に保護者や地域住民では責任が重すぎるのもっと大きな後ろ盾が欲しいという意見もみられた。

(3)冒険遊び場および施設に求められる機能や特徴について(小屋づくりワークショップの事例)

名古屋市の都市公園にて週5日実施されている常設の冒険遊び場を調査対象として、活動実態等を把握した。また冒険遊び場で実施された小屋づくりワークショップ等の内容から、参加者の冒険遊び場および施設に対する意識や、冒険遊び場および施設に求められる機能や特徴について把握した。

ここでは、ワークショップの内容、参加者の発言内容等からわかった当該冒険遊び場に設置される小屋に関して求められている機能や特徴について示す。

・収納空間としての機能：遊びや様々なアクティビティを展開するのに必要な器具、遊具その他物品の収納が可能な空間。

・シェルターの空間としての機能：休憩、集い、一時避難、授乳、着替え等が可能な空間。
・事務的空間としての機能：場所の維持管理に必要な事務作業、数名での簡易ミーティングも可能な空間。
・情報空間としての機能：地域の情報、遊び場で展開するアクティビティについての情報発信、掲示板の役割が果たせること。
・シンボル性：場所のシンボルとしての機能を果たす。同時に安心感にも結びつくこと。
・アクセシビリティ：始めて訪れた人、通りがかった人、子どもから高齢者まで、この場所を利用しやすくするものであること。
・景観形成：この場所の地形や自然環境、そしてそれらを活かした多様なアクティビティに配慮した配置や形状。

参加者の小屋に関して求める機能や特徴は、以上のようにまとめられる。調査対象の冒険遊び場において、場所および施設に求められる機能や特徴が読み取れるとともに、子どもの遊びを中心としながらも、地域のコミュニティ施設としての意識が共有されていることがうかがえた。

上記では、主な調査の内容、成果について示した。上記のほかにも、事例調査を通して、遊び場の空間的特徴等いくつかの論点が見いだされた。考察に関しては、部分的な事例からの考察にとどまったが、有用な事例把握がなされたと考える。今後の課題としてより精緻な考察と調査・分析があげられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

井筒陽祐、和田遼平、大影佳史、ニュータウンの道スペースにおける子どもの遊びに関する研究 -千里ニュータウンと彩都西における調査から-、日本建築学会学術講演梗概集、査読無、2018、印刷中

和田遼平、大影佳史、放課後子ども教室の実施と運営に関する調査研究～宝塚市立小学校の事例、日本建築学会学術講演梗概集、査読無、2016、pp.393-394

〔学会発表〕(計2件)

井筒陽祐、和田遼平、大影佳史、ニュータウンの道スペースにおける子どもの遊びに関する研究 -千里ニュータウンと彩都西における調査から-、日本建築学会大会(東北)学術講演会、2018

和田遼平、大影佳史、放課後子ども教室の実施と運営に関する調査研究～宝塚市立小学校の事例、日本建築学会大会(九州)学術講演会、2016

6. 研究組織

(1)研究代表者

大影 佳史 (OKAGE, Yoshifumi)

関西大学・環境都市工学部・教授

研究者番号：20303852